

「遙香ちゃん、ぼーっとしてないで、ちゃんと先生の話を聞いて！」

これは、私が小学一年生の時、通っていたスイミングクラブの先生に言われた言葉だ。私はきちんと先生の顔を見て、話を聞いていた。でも先生には、私が上の空に見えたようだった。この言葉に「ちゃんと聞いているのに」と、私は少し傷ついた。

私は生まれつきの弱視で、両目ともに視力が〇・一以下のため、物心ついた時から私は厚いレンズの眼鏡をかけていた。また同時に右目は正面を向いても左目が違う方向を向いてしまっている間歇性斜視でもあった。そのため小さい頃から斜視治療のために、左目で見ると訓練をしていた。しかし時には意識していないと左目の視線が外れてしまい、ぼーっとしていると勘違いされてしまうことがあった。

「その眼鏡ちゃん、もう少し右に動いて見て。」

小学四年生の頃、校外学習で博物館を訪れた。博物館の正面前で記念の集合写真を撮るために並んでいた時、カメラマンが私に向かってこう言った。

そのカメラマンは私に対して、決して意地悪を言ったり、傷つけようと思ったりした訳ではないのだろう。他の人が聞いたら何とも思わないのだろう。しかし、そのカメラマンが無意識のうちに発した「眼鏡ちゃん」という言葉により、私は「他の子と違う眼鏡をかけている女の子」であり、他の人から見れば、私は「眼鏡をかけているのが特徴の子ども」なのだということに気付かされた。また、私は他の人とは違う、私は『普通』じゃないことを自覚させられた言葉だった。私は残りの校外学習を楽しむことができなかつただけでなく、その後もずっと、「どうして私の目は他の人と違うのだろう」「どうして私は『普通』じゃないのだろう」と落ち込み、弱視で斜視の目に生んだ両親を心の中で責めた。眼鏡姿の自分のことが嫌いで、それが自分にとってコンプレックスになった。だから早くからコンタクトレンズをつけることをねだった。小学六年生になり眼科医によく許可を得ると、学校に通っている昼間はコンタクトレンズをつけることにして、眼鏡をかけるのは家にいる間だけにした。

しかし、そんな私の考え方を友達のある一言が変えてくれた。それは、小学六年生の卒業際に、入学以降の六年間の写真をクラスの皆で見ていた時だった。その友達は、四年生の時の眼鏡をかけている私の写真を見ながらこう言った。

「私、眼鏡をかけることにずっと憧れていたんだよね。だから、羨ましかった。」

この言葉に驚き、救われた気持ちになった。あわせて「どうしてなのだろう」と思った。その友だちの視力は両目ともに一・五以上で眼鏡をかける必要はない。私の方こそ、裸眼でいられるその友だちのことを羨ましく思っていた。

そこで考えた。「普通」って何だろう。コンプレックスって何だろうということ。

私は、自分が弱視であり斜視であることが、他の人と違って「普通」じゃないと思い、それをコンプレックスに感じていた。でも考え方を変えれば、私は他の人と違い、周囲の人に対して、自分の気分によりコンタクトレンズをつけることで裸眼のように見せること

もできれば、眼鏡姿を見せることもできる。分かりやすい特長の一つだ。つまり、「普通」じゃないことやコンプレックスに感じていることは、見方を変えれば私にとって「個性」なのではないだろうか。

この世の中には、似ている人がいたとしても誰一人として同じ人はいない。背の高さや目や耳、鼻の形、髪の色、体形や声の大きさなど、全てが人それぞれだ。また、生活している環境も人によって違うので、ものの見方や考え方も人それぞれだ。だから、コンプレックスに感じることも人それぞれだろう。でも全ての人が「普通」なんて思うことはないのだと思う。

私は今後も自分の弱視と付き合っていかなければならない。ただ私がコンプレックスだと感じたそれは、他の人から見れば、「取るに足りないこと」のように感じるかもしれない。だから私も、それをコンプレックスと感ずるのではなく、私自身の個性として、ありのままを受け入れ、認め、物事を前向きに考えていくようにしたい。また、私と同じように自分のコンプレックスで悩んでいる人が多くいることを念頭に置き、私発信でその人達の気持ちを理解し、共感できる人になりたい。人の心の痛みが理解できる人になりたい。「普通」なんてないということを伝えていきたい。今後はその人の持つ個性そのものを尊重していこうと思う。